

仮面ライダートライ KAMEN RIDER TRY

名もなきA・弐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この星は、多くの生物が生きている。この世界は、無数の文化が発展している。

そして人類は、生み出された禁断の秘薬によつてその身を毒されていた。

怪人『インジェネミー』に、自らの正義を注^{TYUINYU} 入せよ！仮面ライダー
トライ!!

目次

仮面ライダー KAMEN RIDER TRY	1
混沌の殺戮者	8

人のいるその場所から逃げ出す。

怪人『エッジ・インジエネミー』は常軌を逸した笑い声と奇声をあげながら左腕を振り回して周囲の物体を切断する。

しかし、そこで怪人がある人影を見つける。

「う、ひつく…ママア…」

母親とはぐれてしまったのだろう、小さな背丈の少女がこの場にいる母親のことを呼びながら泣いていた。

エッジはそれに対して、言い知れぬ高揚感を覚える。

不気味な笑みを浮かべて、ゆつくりと近づきながら彼を左腕と同化したカッターナイフを構え、少女に向かって振り下ろそうとした瞬間だった。

「ちよつと待った」

『?!?!ぶへっ!!』

突如聞こえた少年の声と共に、動揺した隙を狙われてしまったエッジは蹴り飛ばされてしまう。

地面を転がる羽目になったエッジが慌てて起き上がるが、既に少女は母親らしき女性と共に逃げ去っており、追いかけてしようとするがそれを阻むように少年が立ちはだかる。

「…たくさー。こっちは学校だつてのに、お前のせいで早退したじゃねーかよ」

ぼやく少年を、エッジは黙って観察する。

彼の言葉通りなのだろう、服装はブレザータイプの学生服を着ており肩には学校カバンを下げている。

何処からどうでもただの少年に安堵したエッジは不気味な声で威嚇をする。

『ひやはは、誰だか知らないけど僕の楽しみを邪魔した罪は重いよお…その肉体を思い切りズタズタにしてあげるよっ!!』

「ノーサンキュー。自分より弱い奴しか狙わない腰抜け野郎に倒されるつもりはないし、そもそもお前の悪ふざけはここで終わりだよ」

エッジの言葉に、ため息交じりに答えた少年は懐からある物体を取り出した。

サイドにはエッジが使用したデバイス『Iスキャナー』と酷似した試験管のパーツがあり、右斜め前のスロットがある。

動揺するエッジを余所に少年はそれを、軽く腰に当てるとそこから緑色のベルトが伸びて固定される。

するとベルトの左側にホルダーケースのようなデバイスが出現すると、少年はそこから一枚のカードを取り出した。

そのカードには「武術を究める戦士スタッグ」と書かれており、クワガタを模した紫色の甲冑を纏った戦士のイラストからまるでTCGのように見える。

紫色のカード：『ドラッグエナジーカード』をスロットに装填すると、Jポップを連想させる待機音声が鳴り響く中、少年は両腕をクロスさせて左側にあつた丸いサイドレバーを押し込んだ。

「変身っ!!」

【TYU—NYU—!・ STAG!・ 道を究めて武士道・騎士道!!♪】
何処かコミカルな電子音声が鳴り響くと、スロットに装填されていたドラッグエナジーカードが紫色に光り、それが試験管のパーツに蓄積される。

装填したカードと同じ絵柄のエネルギーが少年と重なった瞬間、その姿を変えた。

紫色のスーツを纏った姿をしており、クワガタを彷彿させる二本に伸びたアンテナが特徴で武者と騎士のような紫色の軽鎧が左右に配置されている。

『な、何だお前っ!?!もしかして僕と同じ…!』

「惜しい、不正解だ。俺は『仮面ライダートライ』：お前を倒す正義の味方さ」

そう名乗った戦士：トライは地面を蹴って距離を詰めると、エッジの胴体に拳を叩き込む。

今まで感じたことのない激痛に、動けなくなるエッジの隙を逃さず続けてコンボを叩き込む。

「オラ、オラッ、オラッ!!」

『ぐっ、がっ!ゲボッ!?!』

ストレート、フック、アッパーカットからの下段から中段のキックを次々と打ち込まれるエッジは負けじと反撃しようとするが、止めに放たれたパンチが顎に打ち込まれた。

着実に追い詰めるトライはホルダーから先ほどとは異なる、ドラッグエナジーカードを左側のスリットにスキャンして読み込ませる。

「スキルカードTYU—NYU—・ ATTACK CHAIN!!」
「そらっ!!」

『があああああああっっ!!?』

試験管に入った光が点滅すると、スキルカード『アタックチエーン』の効果が発動する。

両手両足に淡い光を纏ったトライは目にも留まらぬ速さでコンボを繋げていく。

止めに放った勢いのあるキックを受けたことで地面に転がる結果となってしまう、這い蹲るエッジ目掛けて強烈なサッカーボールキックが炸裂する。

『ひ、ひいっ!!』

勝てるわけがない……そう判断したエッジは地面を這ってそのまま逃げ出そうとする。

しかし、それを止めたのはトライだ。

「させねーっつの」

『っ?!ぐほあっ!!』

肩を掴んで無理やり振り向かせると、顔面に拳を叩き込む。

再び地面に転がる結果になったエッジの脳裏に浮かび上がるのは力を手に入れる前の平凡だったころの自分：他人のブログを炎上させることしか出来ない情けない自分。

冷たい視線を浴びせる他人に対して、見当違いにも程がある負の感情を爆発させた。

『ああああああああああああっっ!!』

「うわっっ!!?」

全身から生やした刃物を剥き出しにしたエッジに対して驚きながらも、トライは繰り出される攻撃をバックステップで避ける。

明らかにパワーアップしている彼を見たトライは冷静にホルダーから緑色のドラッグエナジーカードを取り出す。

「だったらデツキチェンジだ」

【TSUIKA TYU—NYU—！ HOPPER！ 勇気を力に、Im a BRAVER!!♪】

「力と魔法の勇者ホッパー」と書かれたカードをスタッグの代わりにセットしてレバーを押し込むドライバーの試験管のパーツに緑色の光が溜まる。

トライのスーツは緑色に変わり、勇者を彷彿とされる重厚な西洋甲冑とマントを上半身に装備した形態『仮面ライダートライ ホッパーモード』へと変わる。

【武装カードTYU—NYU—！ YUUSHA SWORD!!】
「オラッ！」

『ぐうっ！お、重いっ!?!』

「まだまだあっ!!」

【スキルカードTYU—NYU—！ POWER UP!!】

『ぎぎやあああああっ!!?!』

専用武器『ユウシャソード』を召喚したトライは相手を斬り裂き、続けてスキルカード『パワーアップ』を発動させて強化された斬撃でエッジを吹き飛ばした。

再び地面へと転がった彼を見たトライは、再びスタッグカードを装着して元のモードへと変身する。

「これで決めるぜっ!!」

【必殺技TYU—NYU—！ ファイターキック!!】

宣言したトライはスロットからスタッグのカードをスキャンさせる。電子音声が鳴り響いた途端、エネルギーが両足に蓄積させると彼は

空高く跳躍して急降下キックを繰り出した。

「はあああああああっ!!?!」

『がああああああああっ!!?!』

ファイターキックを受けて吹き飛ばされたエッジ・インジエネミー

が爆散すると、泡を吹いて気絶している少年がおり、粉々に破壊されたIスキャナーと焼却されたドラッグエナジーカードの切れ端が残る。

戦闘が終わったのを確認したトライは自前のスマートフォンで連絡を取った後、愛車であるスーパーバイク『マシンインセクター』へと向かい、そのままエンジンを蒸かして何処へと去ってしまった。

仮面ライダートライ……彼の目的は、邪心へと飲み込まれた人間『インジエネミー』へと変貌させる禁断の秘薬『ドラッグエナジーカード』を殲滅させること。

そのために、彼はただ戦うのだ……己の正義と、自らの記憶のために。

『実験結果その3。負の感情を常に出している人間がドラッグエナジーを注入した場合、誕生するインジエネミーは最弱となる……か』先ほどのトライとエッジの戦いを観察していた異形は、そう一人ごちた。

全身を覆う姿は白いスーツとなっており、何処かダークヒーローのような洗練された姿をしている。

身体にはクモを思わせるような青いパーツとバイザーがあり、その下には不気味な三つ目が見える。

彼はエッジにドラッグエナジーカードとIスキャナーを渡した張本人なのだが、加勢するつもりはなかった。

今回はあくまでも仲間の一人に頼まれた実験の協力であり、エッジはただの観察対象でしかなかったからだ。

しかし、おかげで面白いものを見ることが出来た。

噂のヒーローがどういった存在なのかを知れたし、興味深いデータを得ることも出来た。

こちらとしても万々歳なのだろう、感情こそ分からぬがこの状況を愉しんでいることだけは確かなのだろう。

『精々足掻けよ、仮面ライダー』

加工された青年のような声色で楽しそうに、嘲笑うように言い放つ

た異形：『キリングリッター』は姿を消すのであった。

混沌の殺戮者

巨大な鉄球が右腕と同化した灰色の怪人『ブレイカー・インジェネミー』は目的の場所へと向かうべく、周囲の器物を破壊しながら歩いていた。

目指すはかつて妻だった女性のマンション：愛してやったのにあつさりと自分を捨てた彼女に対して怒りを燃やしながら移動を続ける。

自分を捨てた妻も、自分の親切も言えないバカ共に天誅を下してやる……。

小さな物差しでしか自分を測れない小さい男、それがブレイカーの変身者でありどうしようもない小物。

しかし、そんな彼の気分には水を差す存在が現れたのだ。

黒いフードで詳しいことまでは分からなかったが、少なくとも身体つきから少年であることが分かる。

目の前にいる少年にブレイカーは訝しげに不愉快な感情が入り混じった視線をぶつけるが、気にすることなく彼は口を開いた。

「随分と派手に暴れてるな、ブレイカー。だけど、そろそろ遊びは終わりだ」

『はっ?』

「もう実験は終わったんだよ。お前はこれ以上進化はしない、さっさとドラッグエナジーカードを渡せ」

気軽に話し掛けてくる少年の言葉に、ブレイカーは間拔けた声を出す。

最高の力を手に入れた自分に一方的な要求を告げる彼にすぐ憤怒の感情が湧き上がる。

『おい、あんまり俺を怒らせるなよガキ。お前も痛い目に合いたいのか、あつ?』

「怖いものはない」と言わんばかりの態度を見せるブレイカーを見た少年はため息を吐く。

実験として負の感情を人目も憚らずに出す人間にDEカードを渡

していたが、大半のモルモット共は尊大な態度を取り始めるのだ。
少しばかり、痛い目に合わせるか……。

呆れたように首を振った少年は、ハンドボウガンのような不思議な武器を取り出す。

紫と緑色のカラーリングがれた禍々しい印象のあるボウガン『チェンジクロスボウ』の上部にあるスロットに一枚のDEカードを挿入する。

毒々しいクモの装甲を纏った戦士のイラストと、「混沌の殺戮者スパイダー」と書かれたそれをセットした瞬間、禍々しい待機音声が続く。

『っ!?!』

それに動揺するブレイカーに気にする様子も見せず、彼はチェンジクロスボウを上空へと向けた。

「ヘンシン……」

【TYU—NYU—…! SPIDER! KILLING THE KILLER…!!】

掛け声と共にトリガーを引いた途端、チェンジクロスボウから注射器やダーツを模した太い矢型のエネルギーが発射される。

低い電子音声と共に少年の右上半身と左下半身は黒い糸に、左上半身と右下半身は白い糸に包まれて洗練されたスーツの形状へと変貌する。

クモ特有の白く濁った三つ目がブレイカーを捉えると、チェンジクロスボウから更に電子音声が鳴り響いた。

【ENFORCEMENT!!】

チェンジクロスボウが「強制執行」を告げたその瞬間、発射されたエネルギーが色取り取りの花火のように爆ぜると今度は雨のように矢型のエネルギーがスーツに降り注ぐ。

やがて両肩と胸部、頭部には蜘蛛を模したパーツとバイザーがセットされた。

インジエネミーでありながら、有害となる同胞を葬る怪人…彼の名前は。

『俺は「キリングリッター」…最後の手向けだ。花火のように散らしてやるよ』

『…調子に、乗ってんじゃねえよおおおおおおおおおっつ!!!』

素性を隠すためのボイスチェンジャーシステムを作動させながら、キリングリッターは挑発するように指を動かす。

刺激されたことで凄まじい勢いで駆け寄ったブレイカーは鉄球を振り下ろす。

しかし。

『おっと』

大振りで単純なその攻撃が当たるはずもない、キリングリッターは難なくそれを躲してバックステップすると僅かに笑みを漏らす。

それに気づいたブレイカーは相手を叩き潰そうと滅茶苦茶に腕を振り回すが何れも空振りで終わってしまう。

不意にキリングリッターが腕を振るう、何かと思った瞬間にブレイカーの側頭部に重い衝撃が与えられ、地面を転がる羽目になる。

キリングリッターの左腕には長い糸があり、先端には高質化した糸の塊がある…モーニングスターの要領でブレイカーを思い切り殴り飛ばしたのだ。

『今度はこれでどうだ?』

両腕から蜘蛛の糸を張ると、今度は曲芸師のように縦横無尽に回ってチェンジクロスボウからエネルギーを乱射する。

『ぎゃああああああああっつ!!?』

直撃を受けたブレイカーは、今まで味わったこともない激痛によって地面に叩きつけられる。

着弾された箇所は紫色に染まっており、そこから更にダメージを重ねているのだ。

『おいおい、そんなに痛がるなよ』

『がっ、ゲボツ!!』

楽しそうに笑いながら、糸から降りたキリングリッターは毒に染まった箇所を蹴り飛ばす。

追い打ちを掛けるように、執拗に急所を攻撃する彼の冷酷な戦法にブレイカーの精神は限界に来ていた。

しかし、自分中心の考え方をしている彼にとって逃走という手段はなく、一矢報いようと鉄球をぶつけようとする。

だが、その選択肢を取ったことを彼は後悔することになる。

『その目、ちよつと気に入らないから潰れてくれ』

【スキルカードTYU—NYU…!! POISON BOMB!!】

『あつ?…ぎゃああああああああああつ!!』

日常会話のような軽い口調でスキルカード『ポイズンボム』による毒の爆発がブレイカーの顔面に直撃した。

紫色の爆風によってブレイカーの頭部に輝が入り、視力もともに機能しなくなる。

本来ならばインジェネミーのダメージは変身者には残らないのだが、その猛毒はブレイカーの変身者自身も浸食を始める。

『あつ、ひつ!?来るな、来るなあああああああつ!!』

視界も暗くなり、キリングリッターの声と足音が耳に入ってくる彼の精神はどうとう破壊された。

ただ自分に襲ってくるクモにただ恐怖することしか出来ず、最後の抵抗をするように腕を振るって大きく暴れる。

その見苦しい態度にキリングリッターも呆れることしか出来なかった。

『…はあ、やれやれだな』

あまりの見苦しさにため息を吐いた彼は、再度スパイダーのカードをスキャンさせて必殺技のシークエンスを開始する。

【必殺技TYU—NYU…!! POISON BREAK…!!】

声を放つこともなく放たれた紫色のエネルギーは、高圧の猛毒を凝縮させた一発の矢…。

凄まじい速度の『ポイズンブレイク』は寸分の狂いもなくブレイカーの鳩尾へと命中した。

『ひつ!?あつ、ぎゃあああああああああつ!!』

猛毒の一撃をその身に受けたブレイカー・インジェネミーは恐怖に

染まった悲鳴と共に爆散する。

変身者である男性は破壊されたDEカードとイスキャナーの近くで激痛の走る、光すらも見えなくなった両目を抑えて悶え苦しむ。

「痛てえ、痛てえよ…誰か、誰か助けてくれえ…誰かつ、誰かあああ…!!」

『さて、モルモットはこれで全部か…』

「苦労したな」と耳障りな声を発する実験体を蹴り飛ばして、無理やり黙らせたキリングリッターは上機嫌にその場を後にする。

混沌を巻き起こす毒蜘蛛は、ゆつくりとこの街を侵食しようとして動き出すのであった。